スケジュール	
◆　1日目　◆　11月15日（火）	
11月14日 ～ 23:40	チャンギ空港到着、各自出国準備
01:20	エミレーツ航空EK405便にて、 チャンギ発ドバイ行き
04:30	ドバイ国際空港到着
	乗り継ぎ（乗り継ぎ時間3時間20分）
07:50	エミレーツ航空EK971便にて、 ドバイ発テヘラン行き
09:40	エマーム・ホメイニー国際空港到着
	入国後コーディーネーターと合流、 バスにて昼食会場に移動
PM	PARSIAN ENGHELAB HOTEL内にある ENGHELABレストラン（昼食）
	バスにてホテルに移動後、チェックイン
	JETRO TEHRAN様訪問 －プレゼンテーション －質疑応答
	バスでホテルに移動
	休憩
	ESKAN HOTEL内レストラン（夕食）
	終了
	ESKAN HOTEL泊
◆　2日目　◆　11月16日（水）	
AM	ホテルにて朝食
	ホテル出発
	IRANIAN SANDEN INDUSTRIES社様訪問 －プレゼンテーション －工場見学 －質疑応答
	バスで移動
PM	EVIN HOTEL内PARDISレストラン イラン日本経営協議会様と会食（昼食）
	バスで移動
	ZOLLAMVARI社様（ペルシャ絨毯）訪問 －製造工程見学
	市内に向け、バスで出発
	DARCHIN RESTAURANT（夕食）
	バスでホテルに移動
	ESKAN HOTEL泊

スケジュール	
◆　3日目　◆　11月17日（木）	
AM	ホテルにて朝食
	ホテル出発
	SAIPA社様訪問 － プレゼンテーション － 工場見学
	SAIPA社様内で昼食
	バスで移動
PM	市内視察　バザールにてショッピング
	バスで夕食会場へ移動
	DARALE UPSレストラン（夕食） 東京外国語大学・テヘラン自由大学 教授　八尾師誠様と会食
	バスでホテルに移動
	ESKAN HOTEL泊
◆　4日目　◆　11月18日（金）	
AM	ホテルにて朝食
	各自チェックアウトし、集合
	バスで出発
	市内視察　サードアーハード宮殿 －MELLAT PALACE MUSEUM (WHITE PALACE) －GREEN PALACE MUSEUM －FINE ART MUSEUM
	バスにて昼食会場に移動
PM	KHANGHANレストラン（昼食）
	テヘランの地下鉄に乗って移動
	市内視察 －ゴレスタン宮殿 －バザール －イラン考古学博物館
	バスでエマーム・ホメイニー国際空港へ
	エマーム・ホメイニー国際空港到着 チェックイン、出国手続き
20:05	エミレーツ航空980便にて、 エマーム・ホメイニー国際空港発ドバイ行
22:50	ドバイ国際空港到着
	乗り継ぎ（乗り継ぎ時間3時間40分）
◆　5日目　◆　11月19日（土）	
02:35	エミレーツ航空EK432便にて、 ドバイ発チャンギ行き
13:45	チャンギ空港到着、解散

2016年度　海外ミッション

事務局作成レポート

（イラン・テヘラン）

本年のJCCI海外ミッション団はイランのテヘラン周辺を訪問した。

イランは紀元前より続く長い歴史をもつ。広大な古代オリエント領域を統治したペルシア帝国に始まり、イスラム化やモンゴル帝国の支配を経て、その後いくつもの王朝の隆盛と支配領域の縮小と拡大を繰り返し、16世紀のシーア派・サファヴィー朝の支配、20世紀初頭の立憲革命と石油の発見、1979年のイラン革命を経て、現在のイラン・イスラム共和国が誕生している。

国内西半部はイランでも人口稠密であるが、この地域にはザーグロス山脈やイランの最高峰ダマーヴァンド山（標高5,604m）を含むアルボルズ山脈がある。一方、イランの東半は塩分を含むキャビール砂漠のような無人に近い砂漠地帯が広がり、塩湖が点在する。

平野部はごくわずかで、大きなものはカスピ海沿岸平野とアルヴァンド川（シャットゥルアラブ川）河口部にあたるペルシア湾北端の平野だけである。その他小規模な平野部はペルシア湾、ホルムズ海峡、オマーン湾の沿岸部に点在する。

イランは北西にアゼルバイジャン、アルメニアと国境を接する。北にはカスピ海にのぞみ、北東にはトルクメニスタン、パキスタン、アフガニスタン、西にはトルコとイラクと接し、南にはペルシア湾とオマーン湾が広がる。面積は1,648,000km^{2}で、ほぼアラスカの面積に相当する。多くの国と国境を接するイランは、地理的、歴史的、商業的に重要な地域である。

【ジェトロ・テヘラン事務所でのブリーフィング】
所長　　中村 志信氏

本ミッションはジェトロ・テヘラン事務所を訪問し、イランの基礎情報のほか、経済動向、政局の現況などのブリーフィングを受けた。

政治動向として、まず米国大統領選挙をイランがどう捉えているか、説明があった。ロウハニ大統領は「米国大統領選挙の結果がイランの政策に与える影響はない」と発言しており、イラン側は冷静な反応を示している。一方で、イランへの制裁緩和を盛り込んだ「イランの核問題に関する包括的共同作業計画（JCPOA：Joint Comprehensive Plan of Action）」を遵守する必要があることをザリーフ外相は指摘しており、米国の動向を引き続き注視していく姿勢を打ち出している。

経済について、まずGDP成長率推移は、2012年（最も経済制裁の影響が強くみられた時期）に-6.61％となったものの、その後回復傾向にあり、2016年は4.0-4.5％の成長見込みである。中東におけるイランの立ち位置として、人口は8000万人でエジプトに続く第二位、GDPは4,041億ドルで中東の大国であるトルコ、サウジアラビアに続き第三位となっており、今後消費者市場としても期待されている。しかし、一人当たりGDPは5000ドル程度でイラクをわずかに上回る第10位となっている（一位カタール、二位UAE、三位クウェート）。

国土は広く、インフラ整備を進めており市場ボリュームが大きい。代表的な港湾としてペルシア湾に面するバンダル・アッバス港、インド資本と連携して開発予定のチャバハール港があり、特にチャバハール港にはフリートレードゾーンを設置しており、今後の成長が期待されている。

制裁緩和によるビジネス機会を見込み、各国要人の往来も活発化している。アジアでは韓国の朴大統領が5月に来訪しており、このとき多くの投資MOUを結ぶなど積極的なトップセールスが行われた。制裁下でもビジネスを行っていた中国は多数のインフラ開発で活発な活動を行ってきたが、その他の国が参入する中、少しずつその割合を低下させている。しかし、視察団が空港や街の様子をみている

と、中国人の数が外国人の中ではやはり目立ち、先行してイランで活動している様子が垣間見られた。また、先の通り韓国ビジネスマンの姿も多くみられたことが印象深い。日本との関係では、2008年をピークにイランから日本への輸出が低下していたものの、最近は制裁緩和に伴い、日本からイランへの輸出が伸び始めているようだ。イランの主要な輸出品としては、石油、石油化学製品、殻付きピスタチオが挙げられるが、特に石油・石油化学製品への依存度が高く、国内の産業育成が急務となっている。

一方で制裁中に外資が撤退していたことで、国内産業が育成された一面もある。特にサービス業はGDP内訳の50％強を占めている。

イランの人口は先に述べた通り約8000万人だが、これは一定の市場規模と労働力を有していることを意味する。人口ピラミッドとしては25-35歳の結婚・子育て世代がボリュームゾーンとなっており、医療分野ビジネスでも、ボリュームゾーンが対象となる20－30年後を見据えて事業を推進している。イランでは核家族化が進み、一戸建てから都市部のマンションなどへ変化がみられるようだ。全体として教育水準も高く（留学する人も多い）、中東の中では労働コストが割安（約300米ドル／月）であることから、ビジネスチャンスは十分にあると思われる。

それぞれの分野ごとの特徴については、まず、石油（埋蔵量世界4位）、ガス（埋蔵量世界1位）、鉱物などの資源が豊富。増産も行われる予定で、これらで稼いだキャッシュが国内に還流されることが期待されている。豊富な原油・ガス・鉱物を背景とした石油化学や鉄鋼・鉱業は重要産業であり、今後外資を受け入れるなどしてさらに生産力を上げていく考えだ。

自動車産業も開発が進んでいる。Iran Khodro社や視察団が訪問したSAIPA社は中東を代表する自動車メーカーでもあり、今後さらに増産を進めたい考えであるが、デザインが古いなどの問題があり、日本の自動車メーカーへのラブコールも発せられているようだ。従来からセットメーカーや部品製造などの体制は国内にできているが、これらの工場では、制裁の影響もあり、生産設備が古く、自動化が進んでいない面もあり、今後の改善で生産台数も大きく増える見込みが高い。市場としては、中間層が少ないため、高級車と低価格車の二極化が進んでいるようだ。

インフラ整備については、従来から中国が積極的に関与しており、例えば地下鉄の車両は中国製である。最近ではシーメンスなど欧州企業も活発化しているが、日本企業にも高い期待を寄せている。航空産業については、経済制裁下で機体整備用の部品を調達できず、中古期待を購入して分解し、整備に利用していたようだ。しかし、JCPOAによりボーイング、エアバスの機体輸入が可能となった。情報通信については、ネットの普及は進んでおり、eコマースなども利用されているが、通信環境は非常に悪い。視察団もホテルのWiFiを利用しなければインターネットに接続することはできなかった。クレジットカードが普及していないため、eコマースなどではデビッドカードが一般的に利用される。また、FacebookやツイッターなどのSNSは接続制限されており、また、多くのコンテンツへのアクセスも禁じられている。

建設・建築については、特にショッピングモール、病院やホテルなどの新設や改修が増加しているとのことであった。また、地震も多いイランでは鉄骨を使った建設が基本となる。

水不足も大きな課題であり、海水淡水化技術、再利用水への需要は高い。また、大気汚染がひどいため、環境技術への関心も高いようである。医療分野については、医療機器市場が中東で最も高い伸び率となっており、また、特にドイツと日本の製品・技術への関心・信頼度が高いことから、今後期待される分野である。

ビジネスにおける留意点として、物価・為替が不安定であり、失業率が高く、インフラについて未整備であること、また、政治・地政学的リスクの影響を受けやすいことが挙げられる。また、制度・規制についても不透明な点があり、注意が必要だ。知的財産保護に関する意識も低く、今後外資を受け入れるうえで改善が求められる。一方で制裁緩和により、大企業のみならず日系中小企業も進出に意欲を示しているなど、前向きにとらえる企業が増えている。

（質問など）

・当地における日本人、日系企業の数は？

→日本人は650人で、うち500人はイラン人と結婚して移り住んだ人たち。企業数は23社。

・ドル決済は可能になるか？

→実現には10年かかるという見方もある。トランプ政権に期待する声もある。実際はGEなどアメリカ企業の進出も見られる。

・石油生産の行方

→イランはOPEC加盟国であり、生産調整の話もあったが、サウジアラビアとの対立もあり、合意によらない曖昧で緩やかな生産調整となっている。

・当地における欧州企業の動き

→フランス・ドイツはオスマントルコの時代からイランとの結びつきがあり、企業進出についても先行している。

【イランサンデン工場の視察】

Deputy Managing Director　須藤 和彦氏

ミッション団は、イランサンデン社を訪問した。

同社は自動車システム、流通システム、住環境システム事業をグローバルに展開しており海外23ヶ国54拠点を持つ、またカーエアコンコンプレッサーでは世界で25％のマーケットシェアを誇っている。自動車システム事業では海外23か国54拠点を持つ。

イランではテヘラン、ガズビン（テヘランから130キロ）に拠点を持ち、工場はガズビンにある。当地では空調ユニット、コンプレッサー、コンデンサーをアセンブルして供給しており、イランのトップ自動車メーカーであるKhodro社やSAIPA社が顧客に名を連ね、その国内マーケットシェアは78％に上る。

工場では1165名のスタッフが働いており、ブリーフィングの行われた敷地内と車で5分ほど離れた場所にもう一つの工場が稼働している。

同社の概要のほか、供給先として直結するイランの自動車産業の現況についても説明があった。イランホドロ社1962年に設立されて以来、50年以上の歴史がある。2011年には165万台（世界13位）の市場であり、タイを上回る規模であったが、経済制裁により成長が抑制されていた。イラン政府は2025年までに300万台（国内200万台、輸出100万台）の中期自動車販売数を目標に掲げているが、少なくとも200万台以上の市場規模に成長することは確実と見られている。2大メーカーであるKhodro社、SAIPA社は、それぞれ海外メーカーとの技術提携を結んでおり、今後の開発に期待がかかる。

最後に当地に駐在する須藤氏より、イランの生活についての実体験などが話された。当地では宗教上の理由からお酒が禁じられており、また、テヘランから離れていることから娯楽も少ないとのことであった。また、食事については、地元料理が肉料理中心であるため、駐在員は自炊を行っているとのことであった。

【イラン日本経営協議会（JBAI）との懇談会】

視察団はイランにおける日系企業団体である、イラン日本経営協議会と昼食懇談会を開催した。

JBAIは2015年10月に発足したばかりの団体であり、現在の金友会頭は第二期会頭である（第一期は現副会頭の田中氏）。イランでビジネス活動を行う日本法人、日本人のためのビジネス情報集約拠点を形成すること、そして日本とイランの経済面における良好な関係強化を推進するための活動を2016年の活動に定め、これら活動を通してイランにおける日本ビジネスのプレゼンスを最大化することを目的として活動している。現在、会員数は23社（うち5社が賛助会員）となっており、今後日系企業によるイラン進出が増える中で、会員数は増加していくものとみられる。当視察団約20名は、出席されたJBAI正副会頭や理事をはじめとした役員の皆様から、当地で活躍されるビジネスマンだからこそ知り得るイランビジネスの醍醐味、イランでの生活の様子、苦労する点などを直接生の声として聞くことができた。

【絨毯工房の視察】

テヘラン郊外にある、伝統的な絨毯工房を視察した。いわゆるペルシア絨毯は、シルクと羊毛でできており、このシルクが長年の利用で踏まれることで光沢を出していくといわれている。視察を行った絨毯工房はペルシア絨毯ではなく、伝統的な羊毛100％の絨毯の最終工程を行う工房であった。これらの絨毯は、遊牧民の女性たちが、家々に代々伝わるデザイン、染色技術を駆使して各家庭で織っており、これをこの工房に持ち込んで最後に市場に出す前の調整を行うのである。

まず、積み重ねられた持ち込み絨毯を一つずつガスで炙り、無駄な毛を除去する作業が行われた。持ち込まれた絨毯が土埃で汚れていたこともあり、参加者からは不要な絨毯を焼却処分しているのか、との声が出たほどである。この後、手作業でクリーニングを行い、天日干しし、別の建屋に運んで毛玉や模様の乱れなどを取り除き、四方に引き延ばして丸くなる癖を修正する。こうしてできた絨毯は非常に色鮮やかで美しく、視察団参加者も感銘を受けていた。工房にはアフガニスタンからの出稼ぎ労働者が多く働いており、顔つきも日本人に似た東方アジア系であった。彼らも熟練の技術者であり、絨毯工房では活躍しているとのことであった。

【イラン自動車メーカー　SAIPA社工場の視察】

イランの2大自動車メーカーの一つである、SAIPA社の生産工場を視察した。2015年時点のメーカー別市場占有率を見てみると、トップはKhodro社で50％、そして2位がSAIPA社で34％を占める。2015年以降、規制緩和を背景に周辺国への輸出を急激に伸ばしている。今後はアゼルバイジャンやトルクメニスタン、イラク、そして将来的にアフリカ市場へも輸出を増やしていく予定である。

広大な敷地に生産工場が複数稼働しており、3000人ほどが働いているとのことであった。当工場はかつて別の自動車メーカーの工場があったため、その施設を活用して稼働している。交通の便もよく、大きな道路や鉄道も近くを通り、また、地元の雇用にも大きく貢献している。

工業用水には地下水を利用しており、また、再利用も行う。水の利用自体は多くないので、大きな問題にはなっていない。15時間運転で2ターン制となっており、夜はラインを止めているとのことであった。ルノー・日産の生産モデルを参考にしているとのことであったが、ジェトロ・テヘラン事務所で説明があった通り、生産設備が若干古く、参加者からも自動化が遅れている、との指摘があった。また、視察受け入れに際しては、経済・金融省の外国投資部長であるAlireza Mirveisi氏もSAIPA社側に加わっており、今後日本からの投資受け入れに期待を寄せていること、どんな問い合わせもして欲しい、と日本との新たな関係構築に強い意欲を示していた。

【テヘラン自由大学　八尾師 誠教授との夕食会】

視察団は長くテヘランで研究・教育活動に携わる八尾師教授を招き、夕食懇談会を開いた。八尾師教授が初めてイランを訪問したのはイラン革命以前であり、その後も年に複数回イランを訪問しており、当地の長期的な変化の様子に非常に精通している。

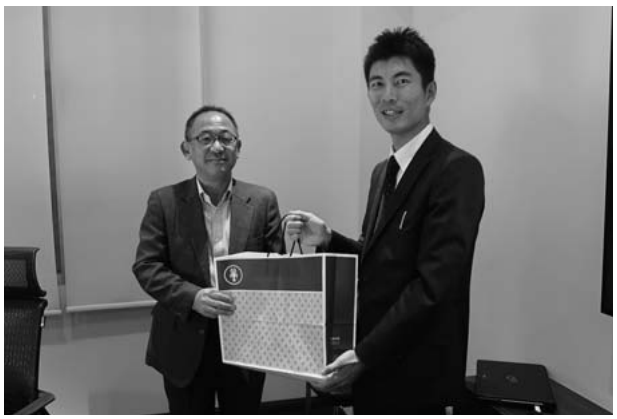
懇談の中では、イラン革命のさなかの国内の様子や、当国における大学教育の現状などが説明された。イランの人材が非常に優秀であり、大学進学率も高く、また、女性で理数系分野において優秀な成績を収める例も多く、今後イランの制裁解除が進んでいく際、大きな助けになるとの指摘がなされた。一方でアメリカに留学した優秀なイラン人が、そのままアメリカに居住してしまいイランに還元できない例が多かったことが、経済制裁下の弊害の一つであったと指摘もされた。八尾師氏自身が経験したこと、感じている雰囲気などを生き生きとお話になり、視察団一同強い関心をもってお話を伺うことが出きた。

事務局を含め、イランを訪問するのは初めてという参加者が多く、ビジネス環境への関心のほか、街の様子や自然環境、イランの人々の様子などを直接見ることができ、非常に有意義な視察であった。空港からテヘランに向かう途中、一面の土漠（さらさらとした砂漠ではなく、土の荒野）であり、ドバイとも異なる雰囲気であった。一方で、カスピ海のある北部は水も多く緑があり、豊かな農業地帯となっているとのことであった。実際、食事についても、野菜や果物が非常に豊富で、また、羊を中心とした肉料理も充実していた。

イランの人々は非常に気さくで、街を歩いていても気軽に挨拶を交わし、また、外国人である視察団にも非常に有効的な態度を示てくれた。バザールは大変な賑わいで様々なものが売られており、豊かな印象を受ける。一方で国内の貧富の格差もあり、また、アフガニスタンなど周辺から出稼ぎに来ている人々との格差も大きいようだった。

もちろん、インフラの整備が進んでいないことは大きな課題であり、通信環境や交通渋滞の原因となる路上駐車、排気ガスによる大気汚染は改善の余地が大きいといえる。しかし、経済制裁緩和・解除が進ことで、長い歴史と優秀な人材をもち、資源豊かで日本と友好関係にあるイランは、今後日系企業にとっても大きなビジネスチャンスをもたらす国となるであろう。

＜イラン・テヘラン視察　写真＞



JETRO Tehran事務所　左：森崎副会頭　右：中村所長

JETRO TEHRAN事務所　集合写真

養殖鱒のフライとご飯

ペルシャ語で書かれたCoca Cola

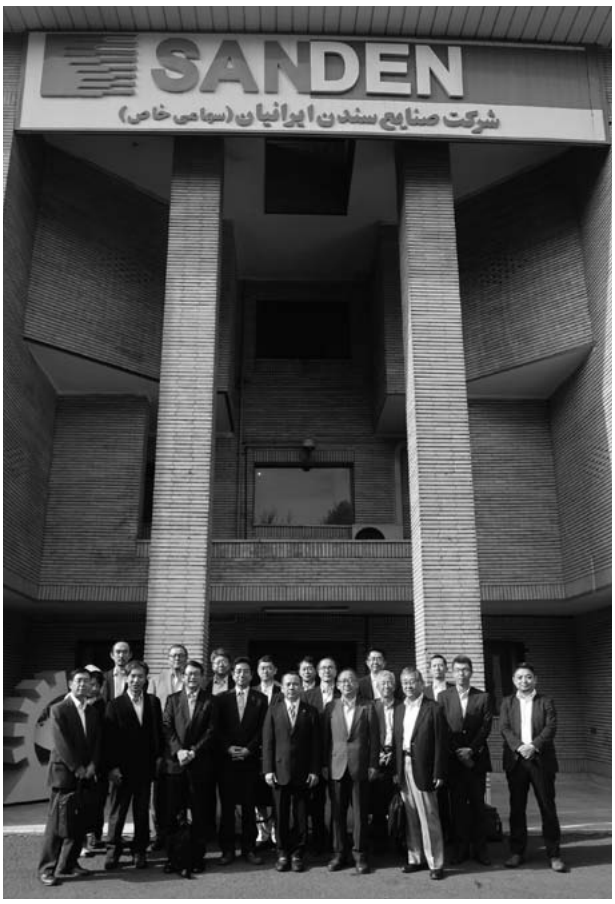
羊毛絨毯工房訪問　集合写真

羊毛絨毯

イランの紙幣

テヘラン市内で見かけるタクシー

Iranian Sanden Industries　左：森崎副会頭　右：須藤様



Iranian Sanden Industries　集合写真

色とりどりなペルシャ文字が書かれたタイル

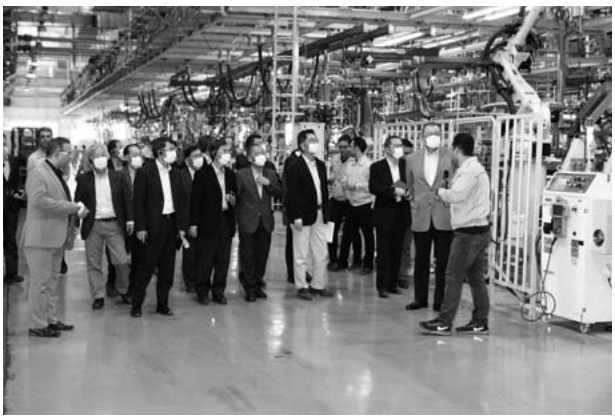
東京外国語大学／テヘラン自由大学教授　八尾師誠氏との夕食会

八尾師氏との夕食会の様子

羊のスペアリブ

市内の至る所で見られるイラン革命防衛隊によって描かれた壁画

SAIPA社にて



SAIPA社工場内見学（写真提供：SAIPA社）

SAIPA社　集合写真

SAIPA社　プレゼンテーション（写真提供：SAIPA社）

テヘランの地下鉄　女性専用乗り場

様々な種類のナッツ

サードアーハード宮殿内　緑の宮殿（Green House）

ゴレスタン宮殿内　太陽の建物（Shams ol Emareh）